

太 棹



しんき画

第
百
八
號

東 京 太 棹 社 發 行

胃腸にミカラチ

東京市日本橋區酒町二ノ十

新潮製藥株式會社

電話茅場町三八一三番
 東京七〇一〇八番

松 幸

すき焼

和洋御料理

淺草公園 (千束二ノ三四)

牛鍋本店

電話根岸 (87) 〇三八〇番
 二〇〇〇番

風流・金ぶら・茶漬

【美地句】

去月屋

新橋二ノ八
 電銀二〇八

紋太夫忌浄瑠璃塚回向

十月廿六日午後一時より久々に紋太夫忌浄瑠璃塚回向を営みました。第一回の例に倣ひ、阪井久良岐氏を始め本誌の寄稿家並に猿蓑、芳太郎、蟻風の三師の御出席を願ひましたが、今回は都合悪しき人々多く、三允、九似庵、煙亭氏の外師匠も蟻風師のみで済みました。



秋風を三筋に紡ぎ當てる擬
 浄瑠璃の故聖を語る良夜かな
 菊活けて稽古休まむ忌日かな
 紋太夫忌秋雨時ともならぬ夜に
 三允 煙亭 芳河 九似庵



太 棹 第百八號目次

文樂座東京引越興行(二)	是澤九似廬	(二)
明治座の文樂(二)	齋藤拳三	(八)
文樂樂屋圖譜	宮尾しげを	(二)
ラヂオ淨曲漫評	金王丸	(三)
義太神樂	中野三允	(四)
第一回批評する會、される會	富取芳河士	(六)
古鞆太夫の「喜内住家」を論ず	内田富太郎	(八)
解散した新義座に就て	一記者	(九)
太棹社彙報		(二〇)
會報		(二九)
通信	竹澤龜次郎	(三〇)
信	森三好	(三〇)
帖		
記	芳河士記	
口		
表紙・カット	紋太夫忌淨瑠璃塚回向	
	宮尾しげを	

文樂座東京引越興行(二)

是 澤 九 似 廬

吉田榮三 (新口村 孫右衛門)

師匠なしの榮三は、稀有の天才肌の人であるとも云へるし、ある意味からして、批評を超越した藝格の巨匠とも云へるのであらふ。

孫右衛門は別して榮三としては、優秀の出来と思つた。純朴な老父の氣持ち、汲めども盡きぬ實親の子に對しての愛情が藝にあらはに表現せられて、遣ふて居る榮三の精神が人形に喰ひ入つて一心同體、人形の小さな科の一舉手にまで油斷がなく、隙がなく、榮三の裱姿が舞臺上にありながら、人形から消へる思ひがして、恰も、人形ばかりが動いて居るやうに觀えて來る至妙の藝中に、抱き竦まされた思ひに陶醉させられた。よくマアあれ程までに、藝に凝られたものと、考へさゝれるばかりである。

孫右衛門の人形は、落付いた、上品の科で、足駄履きの雪路を、傘さしてたどくと歩み來る老人の姿と、足取りの自

然さ、「延紙ひきさくその手もと」から、梅川と對話の間に起きる、孫右衛門の感情が激しく變化する氣くばり、人形振りとは思へぬ情味、寸毫も隙のない行届いた藝の動き、別して幕切で、吹雪の中で孫右衛門が、頭から羽織を被ぶる悲歎の科は、昔からある傘を窄める型よりも遙かに自然で、榮三が獨創による考案なるべく、誰にも眞似られぬ藝と、格との貫祿、小さな人形俳優の孫右衛門が、廣い舞臺の上に唯一人殘されて、雪中で被る羽織の裏から漏れる、生別悲痛の呻きを目前にまざくと見せつけらるゝ、全觀衆は、この悲劇に暗然とさせられた。吹雪の大鼓の音につれて、しづかに締められてゆく緞帳、いつまでも續いて起る幕外の拍手の音、歌舞伎の一流俳優の技巧でも、及ばぬ榮三の腹藝、自然に出る神品至妙。今度の興行で、太夫、三絃、人形遣ひを比較して見ると、汎く好評を博したことは人形遣ひで、段々と東京人土に人形芝居の持つ、獨特の古典の滋味が分かつて來るやうな氣持ちのすることは、觀衆眼の一大進歩で、就中、榮三が

靜寂で枯淡の澁い藝を推賞する人が、年々増して來ることは、喜ぶべき現象である。

我等は、榮三が自分の持つ、過去五十幾年間の藝の體驗と辛慘粒苦による豊富な内容と伎倆を、奥深く胸中に秘めて、決して外面的の效果に捕はれず、終始一貫して自分の歩みゆくべき道念に向つて、精進鍛磨して居る、藝術家としての態度の立派さを、しみじみ敬慕せずには居られぬ。

大隅太夫と廣助 (杉阪墓所と綿繰馬)

杉阪の墓所は、六助住家に對して解説的の面白い語場なれど、昔からの節付が餘りにも粗笨に過ぎ、今度大隅の語場と極まつてから、廣助が節付を改削して居るとの評さを聞き、興味をそゝられて聽いて見た。

故人遺作の古典を改削することは、物語によつては嚴禁すべきであるが、杉阪墓所などは、殆ど顧みられず、昔からなる風格とか、模様なども探究されずにあつたものを手入して、語る太夫の個性に當て嵌めて、淨瑠璃化することは斯道のために結構なことである。

彦山九段目を聽かすためには、この杉阪墓所を語ることは、豫備智識上に極めて意義あり有効のことで、その理由から今度の興行に選び出したものと想像した。この淨瑠璃の主役とも云ふべき六助の性格は、毛谷村よりも、この墓所の方が、いとも仔細に描出されて居る。六助が四十九日の忌中は

寸時も離れず母の墓所に跪坐して、念佛三昧に居る親孝行の性質を呑み込んで、惡浪人の京極内匠が、山賤斧右衛門の母を、自分の實母と伴つて、五百石の知行ほしさに孝行にことよせて、六助に劍術仕合を負けて呉れよとの願ひ、欺かれるとも知らずに六助は、孝行者への同情と、仁俠で讓てやる勝負、まだ頑是ない子供の彌三松が、不思議の因縁で六助の手で養育されて居る理由、作者が描出した苦心は、恰も撒き散らされた種子が。生育して樹木となり、枝がつき葉が繁り、花が咲き、實が結んで、最後にその果實の風味を賞翫するのが、六助住家で、杉阪の墓所は、その熟果を蒐集せんとする豫備行爲で、準備の必要であることは今更でもあるまい。

さて大隅の墓所は、豫期して居た通りで、別に技巧の苦勞もなく、例の中のある持聲で、サラ／＼と語り、六助の朴訥で、正直者の氣持ちが、大隅の聲柄に嵌まつて、京極内匠と對話の間も自然で、奴佐吾平、門脇義平も、マアあんなもので良いのであらふ。裏棚の子供が躡けも、たしなみもせぬやうな明けつばなしの語風、氣樂な無軌道ぶりが、この杉阪墓所にうつついで、大隅の無器用さが、却て、この一段の味を活かして居つたことは、不思議と感心させられた。

三回興行布引三段目切綿繰馬は、大隅の聲に適當して、古典の三段目らしい風格が出て居つて、肩の擬らぬ軽い思ひで聽かれた。細評は抜きにして、我等の希望を云ふて見れば、今少し裏聲を上手に遣ふ研究をしてほしい、この工夫をする

ことが、大隅が大器となるべき緊要條件ではあるまいか、この裏聲が完全に出来ぬものとしたら、徹頭徹尾、腹を詰めて呼吸で語るより外はない。聲巾の豊かな人には兎角に、無器用な人が多く、この無器用な人が、器用な真似をすることが禁物で、どこまでも模倣と、技巧を捨て、精神の眞剣味から出る藝の眞實であらねばならぬ。それについても思ひ出さるゝは、はら／＼屋呂太夫、九世染太夫、先代源太夫、(この人は器用があり過ぎたが未知数でも未來があつた)などで、文樂も染太夫の隱退後は三段目の切場らしい藝に氣品と、餘裕のついた太夫に缺けて、逆櫓や、秋津島切腹などを、聲に苦勞せずと樂々と語り得るやうな大太夫の出現することは、期待が持てぬとしても、せめては餘り器用でなく、古典の風格がのんびりして、大笑ひや、大落しだけなりとも見物を得心させる。玄人の淨瑠璃らしい、胸のすく思ひをさせる太夫がほしいものと、密に大隅の將來性に期待をかける譯だ。

臺灣の臺南で病氣に呻吟して、人生の悲哀と、寂莫さを管めつとした先代大隅太夫が、死期に際して自分の名跡は靜太夫に繼がして呉れよと遺言して異境の土と化した。明治を代表した斯界の巨匠の千萬無量の一言に對しても、今の大隅は緊禪一番、石に喰ひついても、發奮すべきではあるまいか。

大隅の今の伎倆は、その階級からしても、器量から云ふてもまだ／＼完璧とは云へぬので、恰も山嶺を彷徨低迷して居る雲烟の存在で、何としても器量を磨いて、八采の名峰と研を

競ふべく、先代最後の一念を實現せしめねばなるまい。別して大隅は先代の相三味線となつた、三代清六によつて斯界に這入つた因縁からしても、霧地らに精進すべきは勿論で、況や靜岡に生れて朝夕に富嶽の秀靈の氣を眺めて、人となつた關係として、名山大澤よく藝術の天才を生むの古語に従ひ、一介の呼ぶ子の笛に終つてはなるまい。

廣助に望むらくは、大隅の藝を舊殻から、敢然と脱ぎ捨てさして、大器に作り上ることである。嘗て舊年の頃に誌上で當時の相三味線道八に、先代大隅の藝格を知り過ぎて居て、今の大隅に向つて何でも先代主義で、道八の皮肉の藝を叩き込んで、先代とは個性も違ひ、聲柄も違ひ、氣質と持味も違ふ。所詮藝事ばかりは、其の人の持つ特長を考察して、個性を尊重して大器晩成主義で、修行さしてはと希望したが、廣助の相三味線になつてから、語風ものんびりとして、脱線もなくなつた。大隅の藝を通して觀察した今の語風では、先代とは非常に變つた個性の人で、淨瑠璃も今が肝腎要の語り時、相三味の變つたことは、相互にとつて藝に弛緩の生じて來るので、藝のしたしみと、思ひやりで、大隅を立派な三段目語りとする責任は、廣助にもあることを特に期待する次第である。

古勅太夫と清六

(彦山權現六助住家、お俊傳)

兵衛堀川、忠臣講釋喜内住家)

古靱の六助住家の「マクラ」は極めて莊重で「思案吹き散る春風に、梅が香したい鶯の」アノ落付のある錆びた上手な音遣ひは、春の山家の静けさの裏に、嘗ぶき屋根の籬に紅梅が咲き、陽溜りに鶯の音が聽ゆる趣きが浮ばれ、「鳥でさへ法華經と囀るに、身のせはしなさに取りまぎれ、念佛もろくく」に得申さぬ……必ず叱つて下さるな」正直一徹の六助の性格が現れて、藝に眞摯な態度を持し、堅實な古靱の個性から滲み出る精神的表現が、自然に創作上の人物描寫に融合して、古靱の口に合ふた語物と首肯した。「折ふし竹の音も芽えて、ふきならしたる虚無僧が、宿求めんと籬により」清六の絃と不離不即の呼吸「振り廻はしたる尺八の、たけた手き」に……逃げ散つたり」清六の撥の芽ると、古靱の一句一節に油斷もなく、隙のない眞劍味「何とでござんす梵論字」と語り捨てて居る詞のあや、門口の虚無僧との對話の呼吸、子供と横臥して居る六助が、やがて坐りなすまでの榮三が遣ふ人形の思ひ入れと腹藝、きめ詞の仔細の點まで、ゆるがせにせぬ古靱の周到な注意。男まさりの氣丈な、お園も親の仇討に故郷を出て永い間の辛慘と、苦勞に年たけた處女の精神も肉體も、荒み切つたときに、不思議と六助に遭ふて餘りの喜しさに、初對面も忘れて、安心に、氣がとりのぼせて、我慢して來た氣魄が、一時に碎けて、もとの女性に返るまでの心の轉換も、無理がなく、厭味もなく、創作の氣持を碎かぬやうに工夫が出來て、お園が述懐のクドキも無難であ

つた。清六もかゝるものを弾かしたら獨特の味と、藝の芽えが出て、流石に感銘の深い思ひをした。榮三の人形振りと三者渾然たる裏に精神の盈ちた藝の漂ひを満喫させられた。

この語りにくい掴みどころのない、彦九をあれ程に語り活かすことは、古實家であり、研究家である古靱ならではの出來得ぬことで、故人大隅のやうな澁さと大まかな味は求められぬが、要するに古靱の彦九は、藝の保全者として適當した良い典型であると思はれた。この淨瑠璃で思ひ出さるゝは大隅で、六助の詞は荒けづりで、ブツキラ棒の語風、分けて良かったのは山賤の詞で、得も言はれぬ面白さが表現され、到底他の追隨をゆるさぬ味が、今猶、耳について離れぬ思ひがする。

三回興行古靱のお俊傳兵衛堀川は、どうも理詰め過ぎるきらひがあつて、眞世話物の軽い氣持ちに缺けて居た。之を古靱の實力と個性に當て嵌めて見て、批評することが、無理であり、矛盾であるが、眞世話物としては、漂渺とした古典味が乏しく、どことなく重くらくしく、サラ／＼と自然に動く軟柔さに乏しい憾があつた。古靱の精神から滲み出る技巧の苦心が、却て擬古的になる思ひがした。しかし繊細な工夫と、一句一節もゆるがせにせぬ緻密の藝味と、隅から隅まで行届き過ぎるほどの努力には感服した。願くば眞世話ものゝ堀川などは、自分の氣持ちに湧く激しき感情と、緊張し切つた氣魄を、つとめて素直に表現して、大阪眞世話物らしい潤ひと

昔の京阪町人の持つた風格と柔かみを、描出してほしいと思ひがした。今度の堀川は比較的に時間を縮めて語つたことは感銘の一つであつた。「苛責の鬼と思はるゝ」結構ではあつたが普通過ぎて、聊か餘情に乏しい氣がした。「つらい目みせてたもんなや」盲母が人一倍に娘で氣遣ふ情味が漂ふて居た「お俊ぢやないか、傳兵衛さんよう會ひに来て下さんした」注意した語り方、「恨みを聴くも隔たる戸口、心はさうじやないじやくり」眞妙の表情、與次郎が賤しい猿廻しでありながら、正直一途の氣持ちと、氣輕るさもよく描寫されたが、お俊が祇園の遊女といふ艶てやかさよりも、物思ひに懊惱する町家の娘に近い上品さと風情が漂ふて居たことは色氣に缺けた古靱の語法か、アノ「サワリ」の文章などから考へて今ひと工夫してほしい、「我子が可愛い〜と子故の闇に脇ひと見えす」からの盲母の述懐は、堀川としての聴きどころ、可愛い娘を中心に得心してやる實母の描出としては感情の動きが足らず、淨瑠璃に捕れ過ぎて叡智の境を脱離出來なかつたことは、寔に遺憾であつた。

清六の絃「重なる思ひ延べ紙に」「枕に傳ふ露涙」「世話せられても思に被ぬ」いづれも牙え切つた撥のはこび、古靱の淨瑠璃と離れて居てまた就く間の面白さと、研究の深みには感服したが、一段を通じて何となしに色氣の乏しい思ひを浮べたのは榮耀の餅の皮かも知れぬ。

忠臣講釋喜内住家は、古靱として模範的の出來映えて感銘

の深いところがあつた。細評は略して、古靱としていつも耳につく腹の薄さも、隠されて居り、無理な突張りの瓊瑾もなく、眞劍味のこもつた熱演が、この一段の風格を遺憾なく流露して居つた。病中の喜内が一徹の氣質で、一家が糊口に窮して居ても、君恩に活きんとする武士道の氣魄、悴の重太郎が、この程さる大名に抱へられると云ふ話を聴もあへず、喜内は高潮しきつた激怒「ヤイ重太郎」からの詞は、思はず緊張させられて感動を催した。重太郎の「お暇申す」の一言も眞に迫るものがあつた。始めの喜内の喚び聲の「おりゑおりゑ」に就ては、舊時から其氣持のことで、語つた太夫ごとにさまざまの意見が遺されて居るが、古靱は果して誰人の風によつて語つて居るものか、書置のよみくせ、破れ扇で謡の間古靱として獨特の味を聴かして居る。自身の藝に對して分を守ることが太夫としては、最も大切なことで、やつぱり古靱は、かゝる語物になると、人一倍の研究者であると、しみじみ思ふたことは、この淨瑠璃は故人の大隅と、古靱の師匠法善寺が、最も得意な語物の一つで、兩師ともに持味が非常に變つて居つて、互に語り活かし處が違つて居つた。古靱は、この兩師の最も良いところを睨んで、之を自分の持ち味で完成した語り方ではあるまいかと思ふて居る。

忠臣講釋と云ふ題名が、何となく重々しい氣持と、堅くらしい思ひがするが、この淨瑠璃もその通りで、陰氣であり、皮肉であり、丁度、上品な茶料理の吸物を啜るやうな味で、

地味過ぎて、下手な大夫ではどうにもならぬ難場を、聴衆飽かせぬやう締め付て、語り活かした古歌は、お手柄と申より外なく、全體的に觀て古歌には、矢張り、筋の建つた理詰と同情の通つた上品で濫い時代物が、語口に嵌まり個性に適して居ると我等は思ふのである。

清六の絃もかゝるものを弾かしたら卒がなく、期待の藝に滲み通るものを覺えた。

人形では、門造の喜内が光つて居つた。文五郎の女房おりゑは、いつもと違ふて至極神妙で、夫の詞に不安と危懼を包む氣持がよく出て居り、重太郎の詰責に云ひ疎んだ懊惱の風情もあり／＼と見え。榮三の重太郎は更らに人形を動かさぬ腹藝と、貫祿が充ちて居り、我兒の胸に小柄を刺通して、恩愛の絆を斷つ門口の思ひが流石に榮三の人形に露出されたは、凝つた藝と感歎した。

津太夫

(鳥羽離宮と平家琵琶に就て)

この外題は、西の芝居に書き卸したもので、並木千柳、三好松洛の合作で、寛延二年十一月竹本座の初演である。作意は布引の瀧で、多田藏人行綱が、平重盛を弓で射損じ、近江へ逃れて、百姓九郎助の娘の掣養子となつて、女房小萬が太郎吉を生み、後に奴折平と名乗つて、源義賢に仕へる内に、義賢の娘、待宵姫に想はれる、義賢は平清盛に攻められて自死し、行綱は義賢の内室、葵御前を密に九郎助に託して、自

身は待宵姫を清盛の間者に入れて源氏再興を謀ると云ふ筋でその待宵姫との間に生れた女子が小櫻姫で、この鳥羽の離宮は、咸陽宮の紅葉の趣向から來た三人上戸と、松波檢校と偽稱して登殿した行綱の彈する平家琵琶から仕組まれた淨瑠璃で、大時代物として古來から有名なものである。中途で文章と、節付がいろ／＼に改刪せられた増補物ゆへに、筋がはつきりと通らぬ憾みがある。津太夫の「マクラ」に「冬枯の空にしぐろ／＼曇り、世を浮雲に隔てられ」之も近頃になつて書入られた文章と思ふが、其他にも澤山に改訂せられて居る。この布引四段目は力量専門で語る淨瑠璃のことゝて今時では津太夫に打つてつけの出し物、悪からう筈はない。「膝に淵なす斗りなり」からすぐに「歎きの油断見すまして帯に仕込し」と中途を省いて、前に小櫻の愁歎場をもつて來たことは、至極に面白い趣向で、此方がうつりも良く、ダレ間もなくなり太夫としても語りよいと首肯した。この四段目は、腹強くて、突張のきく太夫は語り得るもので、骨の折れる割合には、味の乏しい淨瑠璃で、昔から文樂の方では、淨瑠璃本通りに語つて居り、彦六、堀江の方は、團平の改刪した節付で語つて居る。たしか故人杉山茂丸氏が三四箇所文章を改修せられて、故人大隅がその方で語り始めたやうに記憶して居る。近來になつて團平風とも、文樂の昔風とも分けのわからぬ様な語風になつて居る。太夫の批評は省略して、一言して見たいことは、行綱の彈する琵琶のことである。

明治座の文樂 (二)

—人形を主に—

齋藤拳三

古靱太夫の堀川は昔よりもサラリと語つて居る「ドレまあ燈を灯そ」など味がある「くずが出るぞ」の後の「くずが」を云はないのや「そうじゃ」からすぐ「我子が可愛い」となるのも近年の進歩である。清六の糸は、五つの内堀川が一番いい、老大家が一日一日色あせて行く中に此の人あたりの、大成を切に望む。

人形は文五郎のお俊が哀艶切實の賣女をよく演出した、只「とても末のつまらぬ事だ」母親の髪をなでつけるのは珍型である。榮三の與次郎も此の人の荒物より本役で輕妙だ。特に「好きな飯さへのを通らぬ」で兩手を上げる件と「無筆じあないわい」で右手のホヲ木で輕く床を突く件が面白い。悪いのは紋司のお鶴で、カケ聲もうるさいし、大車輪で三味線を弾くので、客の笑ひ聲で、古靱太夫の淨瑠璃が聞へなく

なる。どうあらうと義太夫が聽へなくては人形芝居はつまらない。

文樂の大道具のゾボラな事は、鳥羽離宮の紅葉の木に幕開きから小櫻をしぼる繩がつるしてあるには啞然とした。いかに人形芝居は無智な所に趣があると云つても、餘りに馬鹿々々しい。あれは其の場になつて後見がかけ可きであらう。

第四回 八月十四日見物

本朝廿四孝のタテは十年振りである。其時は土佐太夫の十種香から狐火に、古靱太夫の勘助物語りだったが、私の行つた日は聲をいためて中途から靜太夫の代役であつた。

昔はよく人形使ひが口をきいたものださうだ、すしやの權太、鏡山の岩藤、妹背山の彌藤次、忠臣藏大序の師直、皆今で

は何とも云はない、桔梗ヶ原で金時と云ふおそろしい頭の玉幸の越名弾正が、バア／＼と小供をあやすのは實にのんびりとして居て面白い風景だ。此處の持場の呂太夫は缺點のふるへ聲がめだたず、堂々として居て大ガカリな近松半二の芝居の發端らしかつた糸の寛治郎は間の小さい三味線だが、清六の次に進境の目立つのは此の人である。景勝下駄場の大隅太夫は痛快な出來である。無器用な美しい下の音で語る景勝は大きく「信濃路へ別れ……」の亂棒なヤンチャンな獨持の味の段切れまで佳作である。廣助亦平常よりも手強く弾切つてよかつた。

さて古靱太夫の奥であるが、先づあの非力の小音で複雑極まる大物を獨持の工夫と研究で無い聲を有る様にこなし附けてしまふ甘さに敬服する。一番の長所は「對面なされ……」以下の唐織の上品な物語りと、お種の「雪やころゝん」である、横藏の手水鉢の水に顔を寫す待合せがあつて「勘助真中に」からは、もしし聲を此の人にあたへない天を恨んだ、清六も五つの内一番これが弾き悪い様に聴へた。

人形は失敗で、第一に太棹が雪の氣持ちに弾く場面をどうしてあゝ足拍子を入れたがるのだろう。第二に慈悲藏が峰松に手裏劍を打つのは全然打毀しである。あれは勘助の後の物語りまでは、お種も見物も共に横藏の仕業と思ひ込んで、其の無慈悲な態度を悪んで居るのが半二の作意である。

只段切れだけは文五郎のお種は神妙であつた。歌舞伎では

私の見た歌右衛門、秀調共に無理にも此の幕切りに顔を出さない。したがつて老婆が自分の偏屈から峰松を殺させて、嫁女許してとお種にわびる、お種も乳房に離れて死ぬる命がお主のお役に立つたと、女同士二人が峰松の死を悲しむ件が丸でカットされてしまつて居る。

歌舞伎が改悪してゐる箇所を正當に復古する事も、今日では人形芝居の一つの役目であらう。私一人の趣味から云へば、横藏を使ふ座頭に景勝も使はせたい。即ち幾分でも姿形が似ていれば見替りに所望する作意が通つて面白いと思ふからである。此の説を謹んで吉田榮三氏に呈したい。ついでに「八寒地獄」のお種の語り所で、小供をあんな大きな聲で泣かすのも打毀しである。玉藏の慈悲藏は鉞を持つて竹藪へ行く引込みの件が面白い。

次が鑊太夫の十種香である。あんな色氣の有る立派な聲量を持ちながらどうして、あゝまで獨自の演り方をするのであらう。完成した義太夫節の傳統を忠實、丁寧に統習しただけでも、此の人の年月と健康を持つてしたら完成した樂士があつたであらう。今からでもあのメリハリだけでも修正したら如何「吊ふ濡衣」と「ふびんとも」が餘りに高低の有り過ぎる事、定めなき世と」と「あきらめよ」が同様「性ある」から「習いぞや」と馬鹿に大きな聲を出す件等。

次の津太夫の吃又はたしかに結構である。然し、あゝ毎年では有難味を稀薄にする。

人形は「止まれ」との件で、又平が右手を高く上げて極ると文五郎のお徳が右はだを抜いて見つめる件と、門造の將監が石を切る間に榮三の又平が舟底にたれて居るのが特種の技巧で、歌舞伎も菊、吉、三津五郎と美事な演技で十分で有る。

壹坂は前半が相生太夫、道八、兩方とも時代物の様な演出後半の織太夫はもつと古鞆ツ氣をはなしたい、要は古鞆の翻案でありたい。直譯では困る。古鞆太夫はあの小音、非力を自覺してあの演出を考へ出した人である。

織太夫は一、二、三と完備した豊富な美聲を正面、眞向から見せる練磨が望ましい。

政龜がめづらしく澤市を使つたが、此の人のものではない。紋十郎のお里は「夫婦ぢあないかいな」で足拍子を入れるのは足拍子亂用である。

第五回 八月十七日見物

義太夫の安宅勸進帳の凡作である理由、節附けが竹本の特徴を出してゐない事と、人形が亦簡素粗朴の特長を發揮しない事である。第一場が能がりの松葉目の舞臺、第二場が寫實のバツクなど可成り出たら目である。

喜内住家の段はすばらしかつた。此の度の古鞆太夫、五種の出し物の内第一位である。

此の一幕の登場人物が、全部上品な零落した人の一家族で古鞆太夫の上品な藝風とビツタリあてはまる。所要時間も短くて、此の人の小音非力が耳立たず堂々たる貫録がある。先代古鞆が最初の一言で聽者を泣かした、老婆の「おりゑ誰やら」など現古鞆太夫も情合十分である。「お暇申す」と云ひ切る重太郎の言葉は實に甘い。重太郎の錯雜した氣持をよく出して居た。人形もよい。

芝居で見ると餘りにも痛々しい慘狀で不愉快な場合が、人形では其れ程實感のない點が有難い。おりゑの死體を人形はこんで來るが、是れも不思議に見悪くない「足なゑ」の喜

内も不快よりも、是れを使ふ門造の技巧を賞翫出來るのは有難い門造は「士は二人の主を持たず」の件など甘く使つた。盃の件で初めてハチ巻を取つて榮三の重太郎と二人呼吸が合つて面白かつた。次が伊達太夫をシンにした櫻丸飴賣りの道行で、紋十郎の櫻丸は童子格子の羽織で出たが、これはどうだらうか。

津太夫の合邦には私は二個所の疑問がある。一つは安藤鶴夫君が先年指適した「若役ぢや入平どんとやら」の件を笑ひ顔の様に云ふ腹ちがい、他の一つは合邦の言葉の「どれ程ほれておつても」を云ひ悪くそうに云ふ件である。是れは「不快と怒り」の氣持ちで云ふ可きではなからうか、謹で諸賢の教を待つ。

玉手御前手負ひの意氣の手強い點は、津太夫合邦の長所である。

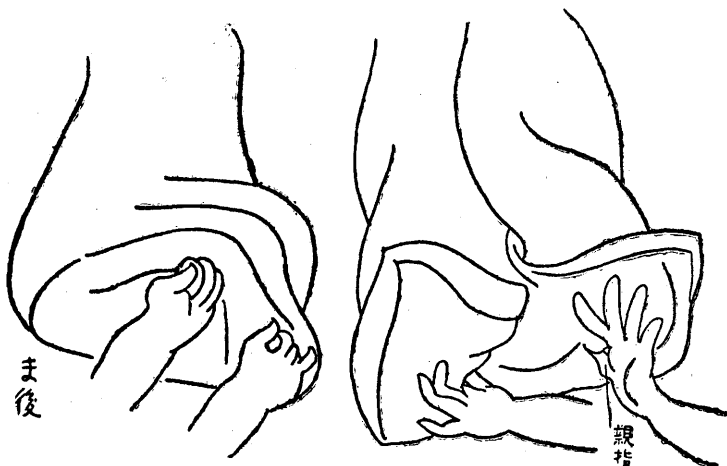
文五郎の玉手、玉藏の合邦は不思議な程此の二人の代表的な悪作である。兩人共に餘りに此の役は演り過るからである、一度小兵吉の合邦、榮三の玉手を見たいもので有る。

三十三間堂棟由來平太郎住家は、鍛太夫、大隅太夫、伊達太夫の三人で語る。此の日は始めに一度に口上を云つた。此の方が變則でも聴きよい。流石に独自の解釋の出ないものだけに、鍛太夫は是れが今度の佳作である。人形は何にもしらずに縁丸と二人で引込んで行く政龜の平太郎に、かへつて人形芝居本來の姿が有る様に感じた。

プログラムに「柳」を三段に別けて、第一場が夢にちる柳第二場が鳥目になやむ孝子、第三場が「母の木をはこぶ稚子」となつて居る。誰の案だか、文樂にも、新らしい人がゐると云ふ事を天下に知らしめるつもりであらうが、をかしいと思ふ。

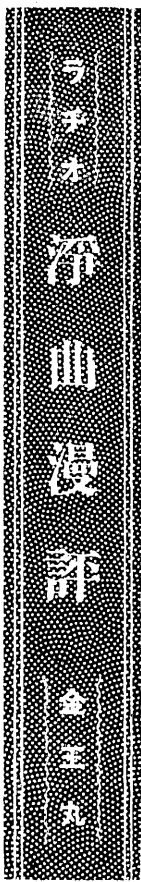
文樂樂屋圖譜

—をげし尾宮—



女形の足遣

女の人形は、特殊のものを除いては、足のつかないのが、定石になつてゐます。しかし歩く形の時は、さもある様に見える爲に足遣ひは、人形の裾の中へ指を入れて、動かしませす。左手に親指と人差指、右手は人差指と中指で、裾の中の一部をつかむ様に挟むのです。これを上手に遣つた時の氣持は、主遣の時より氣持がいゝと云はれてます。眞後の姿を見せる時には、指で挟んでゐては形が悪いので男の足を遣ふ時と、同じ様に布を握つて遣ひませす。



文樂中老

〔八月二十九日〕

伊賀越道中双六

沼津の段

豊竹 駒太夫
鶴澤 清二郎
胡弓 鶴澤 友若

時間の關係で、前の小あげが聴かれずオクリがあつて直ぐに、お米はひとり物思ひ……からである「思ひも寄らず」と切つて「ムーツと心でうなづき」と續けるやうな思ひ入れが割合に多く、心理描寫に骨を折つてゐる。「眞ツくらがアリ」など頗る良く「おのりや手に印籠持つて旦那様のか……などは入れ事らしく、ラヂオでは判りがよい。サワリで「今宵の事は〜」と返へして二度言ふのも、ちよつと思ひ入れの部であつて良い。重兵衛が立ち際に、お米を招いての訓戒で「孝行しや」と言ふ所では少し愁ひが過

ぎたと思つたが「心に一物、荷物は先きへ、足をはやめて……」のあたり無類と言ひたい。松原へ来て、平作は大車輪でシカモすべてアツサリ、と落入りの南無アミダなども數が少なく、清二郎の絃と友若の胡弓とが、可なり微妙に伴奏の効をつとめ、重兵衛も至極サラ〜と演ぜられ、津太夫の例の熱演とは又た一種、小ぢんまりして樂しめる沼津であつた。

東京女義

〔九月五日〕

傾城阿液の鳴門

巡禮歌の段

彈語り 竹本 素女

林の中でも高い木は……で、とかく素女さんが問題になるやうだが、どうが泰然として斯界に活躍されんことを望みます。たしか、素女さんのラヂオは今年に入つては初めてだとおもひますが、素女

さんとしては、例の彈語りでの「鳴門」は、實は腕も咽もムヅ〜する位、屁のやうな語り物だらうとおもひます。所が所がです。同夜は、こちらの耳が悪かつたか、いつもの素女さんとは案外な、元氣もイキもおもふ靈になかなかつたやうに伺ひました。とんと、間延びに、イヤ絶句的につまづき加減の個所が二三回ならずであつたやうでした。尤も放送會館になつてから、ともすれば器機に故障を來たす例もありますから、其のせいだつたかも知れませぬ。しかし、お弓の「言はんとせしが、待てしはし」の結構だつた事、お鶴の「叩かれたアリ」の可憐さなどもさすがに、感服ものであつた事を記憶にとどめておきませう。

大阪女義

〔九月十七日〕

傾城戀飛脚

新口村の段

竹本 清糸
豊澤 仙平

此の上るりは、名人攝津大様も一生滿

足に語られなかつたといふ難かしいものです……とBKのアウンサーが解説した。本當か知らん、さうすると、安藤都昇君のなんかナツツヨランものとなる。サテ此の清糸さんのはどうだつたらう。晝間の演奏にしては四十分といふ時間に恵まれて充分に發揮出来る「立寄らば、大樹の蔭」から、梅忠二人の出も、悪く艶ツぽく語らぬに好感が持てた。好い聲柄、何でもいける調子である。「京の六條の珠敷屋町」もよい。例の忠三のくだり、窓前を通る人達の事などスツ飛ばし突如として老足孫右衛門の出になつた。憂ひも割合に利いて、これは達者である。「是非もなや」も出来た「わたしの姿……」には聊か難があり、段切りに近づいて、少しタレギタになつたが。「とどかぬ聲」は巧かつた。仙平さんの絃は、無論結構である。さて、攝津大椽とどう違つたか幽冥境を異にして……

大阪女義

〔九月廿一日〕

双蝶々曲輪日記

引窓の段

彈語り 竹本小仙

久し振り、恐らく本年は最初の出演かとおもふBKの局寶竹本小仙さんの彈語りである。出し物もさすがに、かいなでの唄うものでなく、澁いといへば大澁な古靱好みとでもいふべき「引窓」である。先づ、ノツケの與兵衛と十字兵衛の語り分け、取つて付けたやうな拙劣なものでなく、世話から武士言葉に代る頗る結構、母親もよし、お早もよし、總ての足取りも間然する所なく、濡髪もシツカリと、稍や博徒染みたといふ評もあるが、立派な角力取、女義と思へぬ聲巾のどうやら古靱さん式のケ所もあり、最も良かつたのは、例の母親の繪姿に搦む「銀一包取り出し」から「未來は奈落へ沈むとも、今の思ひには替へられぬ」まであたり、眞に迫つてホロリとさせる「さらば〜」の段切りまで、どこを抜いたか、ちよつと判らぬほどに十分の纏め方もよいとおもつた。

大阪古老

〔九月二十六日〕

假名手本忠臣藏

山科の段

竹本叶太夫
絃 鶴澤友造

冒頭に御託をしなければならぬのは、當夜障はる事があつて、どうしてもラチオの傍に寄れず、人傳でになりと、評判を聞きたいとおもつたが我等同好の誰れもが、同じやうに聴き洩らしたといふ始末であつた。叶さんは、今は文樂の第一線から退いて、専ら後進の薰育に努め、尙ほ研究を怠らぬといふ淨曲界の大先輩である。

今春戀十の三吉子別れをラチオで聴き敬服したものであつたが、この九段目とはかく義太夫節としては大物に數へられ、その權威としては今や文樂の津太夫氏が目せられてゐるもので、叶さんの口とは、稍やその向きを異にしてゐるから、一般にはどうかとおもひ、更らに、當夜聴き損ねた事を残念におもふ事を附記しておく。尤も當夜は時間の都合もあり、前半だけを語られた筈であるから、津太夫氏とは又た別趣の、好き聴き物であつたらう事は想像に難くない。

義太夫神樂

中野三九

塵外の號を以て俳壇に呼號せる古强者であるのだ。

紋太夫忌

秋風を三筋に紡ぎ當てる撥三九夜、日本橋俱樂部に南北座人形淨瑠璃を觀聽……人形淨瑠璃は觀る丈けでも聽くだけでも完全でない、そこで觀聽といふ語を用ゐる、既に使つて居るか或は他により以上適當なものが現にあるならば甚だ結構だ。双葉太夫の熱演を取る。

二十七日。夜向島百花園に觀月、謂所良夜の月の暈朧にくもる春の景色だ、木母寺に紋太夫、倉太夫の碑を訪ぬるを止め、淺草觀音に參詣、興行界に義太夫に

昭和十四年

九月二十六日

午後一時太樟

社の紋太夫忌

に出席、久々

にて煙亭氏と

對面、俳句の

話も出た、田

中煙亭は其昔

縁故あるものゝないのが淋しい。

二十八日夜、日比谷電氣俱樂部に第十

三回素玄淨曲研究會一周年記念大會を聴く。

一、奥州安達原三段目(岸竹史)

二、日吉丸稚櫻三段目(北島北斗)

三、明烏六花曙(竹本越駒)

素には素、玄には玄の取るべき點がある、それを同時に味はせられるは御馳走様だ。而して味ふ側の態度について忘れてならぬのは素人に對しては先づ自分がそれより巧に語れるか何うかを顧ること

で、玄人に對しては左様な反省はせずともよいので、甲乙丙丁の玄人を比較するとか、故人となつて居る名人上手の故實先例に據るとか、乃至は自己獨特の觀賞から遠慮なき註文を發して可なりであるたゞ兩者を通じて要求せねばならぬものは不眞面目ではないけないといふ事だ。研究的態度を棄てずに素人は素人なりに、玄人は玄人なりに、こゝはかう、あすこはあゝと熱演せぬものに共鳴は起らぬのだ。私は此苦言を特に東京の玄人に送り

たい。玄人としても男よりは女の方が一

般には眞劍だ。男の玄人の其日暮しの語

り方は何うしたものか、中に双葉太夫は稽古熱心だ。他の太夫など眞似すに何處

までも遣り遂げて貰ひたい。素人には天

狗が多い。尤も自分は下手だとのみ考へ

ては、高座に上る勇氣も出ぬので師匠か

ら好い加減のお世辭を眞に受けるも一概

にはくべきでないが、自分は巧いの自惚

れで嫌に澄まされては鼻持がならない。

之れは當日の出演者にいふのでなく、素

玄兩者に對し平素考へて居ることを述べ

たのだから誤解なき様望む、當日のこと

で特に惡評するならば、岸竹史氏はモツ

ト正面を切る修養を積りたい。高座に上

て演ずる以上、太夫も亦も其態度がシツ

カとして居らなければ完全とはいはれな

い。意識してゐないとしても聽衆の視

線を避ける眼付は聽衆との親みを缺く。

北島北斗氏の最初の語り出しは稍々素讀

の氣味があり、切腹したものゝ語氣を缺

いてゐたが「先立つ此身の經陀羅尼」と

「六十餘州はお手車」の佐和利に破綻がな

いので救はれた。竹本越駒は流石であるが、最初の時次郎の聲が男でなかつた。

三十日晝夜、歌舞伎座の藤間勘素娥舞踊茂登女會十周年記念公演に行く、床の義太夫は巖太夫、音女太夫、津彌太夫に三味線仲造、扇之助、市之助、中で私のお染馴は巖太夫だが、巖太夫は一體如何なる修業をして来た太夫であるか、参考に詳しく知て置きたいと平素思つて居る。

十月二日。晝、日比谷公會堂に東京自治功勞記念の催しに出席、餘興の中に南北座の人形淨瑠璃を觀聽、時間の關係で大分短縮され、一向に興味を惹かなかつたが、觀聽者の多くはモウ東京にかういふ人形はないと思つたが、あるのですねえと私に話しかけるものゝある始末で満場から喝采されてゐた。右散會後更に電氣俱樂部の名作淨瑠璃同好會第四回試演を聽く、それは大變よい企てである。語り手も揃てゐた。たゞ私が主催者に注意したいのは換氣の悪かつた點で、幕切れには其都度外へ出ないで居られなかつた。奥庭狐火の段で如何にしても忍耐が

しきれず、割愛して出てしまつた。

これから寒くなるけれども幕間だけは主催者が窓を開けることを忘れないで貰ひたい。私は衛生的見地からとモツト聽いて居たいのを言なければならぬ遺憾さとして一種の憤りをさへ發したのである。尙名作研究は通しものを語るもよいが紙治の炬燵の佐和利で近松の原作と普通に語られる改作のものとを前後して語り比べるやうなことも有益と信ずる。

勸助住家の段にて

火加減の無理難題や水火燵 三 九

(十四、十、三)

繪絹・色紙・短冊

下谷區仲御徒町一ノ一七

波 間 商 店

電話下谷三七〇五番

古靱太夫の二月堂

芳 河 士

私は文樂で二月堂の上演される都度、榮三の良辨に尊敬を拂はずには居れなかつたが、三回目であつたか、使ひ手も太夫も變らぬ良辨に、いつものやうなあの尊とさがなく、榮三も使ひにくさうで、大夫の古靱にもいつものやうなあの品位が缺けてびつたりと來ぬ。私は不思議に思つて、樂屋で某氏に「今度の二月堂はどうもおかしい」と聞いた處、某氏は「今までの良辨と良辨の頭が違ふ、今までは門造の大切に持つてゐる名人の作つた良辨の頭を松竹が借りたもので、今度の頭は、松竹がその良辨の頭を模倣して、今の人形師に作らせたのだ」と言はれた。そこで私は榮三の使ひにくさうであつたのも、淨瑠璃もびつたりと來ず、人形に品位と尊とさを感じなかつたのが、一度に解決した事がある。その人物の品位も現はれぬ頭では、一層人形抜きで、古靱獨特の二月堂をしみみり聴きたいものと思つた。

話は違ふが、竹本都太夫と、素義の松岡茂里雄氏の「目蓮記」を聽いて、いづれも上人から放たるゝ光りを感じて敬服した事がある。

第一回 批評する會・される會

富 取 芳 河 士

事業家としての河野國聲氏は、一方娛樂として愛好の淨曲界にも、新しい會の組織を企て悉く成功し、斯道の向上に努力盡瘁してゐられる事は感謝の至りで、これも氏の新らしき試みとして生れ、去月十日麻生公會堂に於てその第一回を開催された「批評する會」は、これ又非常な好評を以て迎へられた。批評員のうちに加へられた私は辭退をしたのであるが許れられず、しかつめらしく席についてペンを取つたのが斯くの通り。

★**鯨屋**(國聲氏、猿三郎) 神ならずの先きで一寸糸についたやうな處もあつたが、さして耳障りでなく、彌左衛門が非常に自然で良いと思ひました。權太の出が少々弱く、だん／＼強くなつたが、繩付で勿論氏は、女房子供に對する憂ひを含まれたのであらうが、私にはかなり明るい權太に聞えました。

★**吃又**(乃菊氏、佳照) 素義では武市氏や和舟氏の吃又をよく聽いたものですが、此頃久々で此淨瑠璃を聴きました。修理之助と又平との争ひが、やゝ同一人になりかけた事と、吃りの引息が笑ひに近く聞こえた事が缺點で、他は氏の懸命さと熱演に敬服しました。

★**六角堂**(金扇氏、染登) 金扇氏は端語りの聲量でないと思ひます。殊に斯うしたものは適してゐないと思ひましたが、しかし、よく語つてゐられました。

★**帶屋**(かなめ氏、仙照) 長吉の笑ふてばかりが長吉を離れてしまつたやうです。儀平の笑ひは少し薄かつたが、總じてよく語られ氏の此頃の上達は目立つて來ました。

★**本下奥**(大嘉津氏、猿藏) 若狭之助の品も出てをり、本藏も良く、「土に喰ひつき三拜」のあたりは眞に迫つて結構でした。氏の個性がよく現はれ、素人としての持ち味がはつきりと氏に依て窺はれました。琴歌の時に、樂

屋から調子を合せ三味の音が客席にまで洩れて來た、さだめて氏も困られた事と思ふ。

★**新口村**(錦松氏、岡三) よく情が出てゐました「温められつ温めつ」や「廿日あまり」は聲に任せて少し引き過ぎたかのやうに思ひましたが、「珠數屋町」などは至極結構で、孫右衛門もよく語られ、あの幕切の榮三の孫右衛門が彷彿として浮かび出されました。

★**お百度**(子太郎氏、和孝) 珍らしいものを聞かせて貰ひました。氏は斯うしたもの、研究家で、力石になつてからは殊更上出來でありました。

★**先代**(素風氏、辰六) 奥を語られた。政岡が上品で、絃も太夫を助け、五十四郡の大代名の御殿とうなづかれました。

★**草履打**(喜風氏、道之助) 岩藤の憎く味もよく出て、尾上にも町家の娘らしい處がちよい／＼見えて結構でした。

★**妙心寺**(蝶花形氏、染登) 筋もはつきりわかり、こゝろいふ語り風も又いゝと思ひました。素人らしくて却て聽いてゐられる。語り物を印刷して配布されたが、折角の印刷物故これに解説を附されたら此上ないと思ひました。

★**太十**(三司氏、猿三郎) 嘗て聞く、路太夫

の太十は天下一品で、越路も及ぶまいといふ大評判の路太夫が、大越路の三段目で太十を語り、當人大得意で賞められること受合ひとその時前に聽いてゐた松葉家に「如何でしたか」と聞いた。松葉家に「あれが太十か、廿四孝の十段目かと思つた」と言はれ、その意味がわからず、越路に聞いた處、翌日の太十を越路が聞いて「成程、感心したよ。松葉家も教へぬ位なら皮肉らぬ方がいゝに」と後で教へたことは十次郎は討死の覺悟である。その十次郎を浮いて語るから廿四孝の十段目になるといふのであつた。兎に角誰れも彼も語り、多くの人の知つてゐる此の太十は何んと言つてもむづかしいと思ひます。氏は女の師匠から最近男の師匠に變つたせいとか、何んとなく語り憎くさうであつたが、流石年効で語り進むにつれて引きしまつて行つた。さわりも結構、十次郎の物語りも人形の位置に心を置かれて立派であつた。

調子を合はせる三味の音が相當に高く聞こえて來だが、注意すべき事と思つた。

★陣屋（美昇氏、鏡太夫）氏は聲量があり過ぎて兎角うま味のない憾みがあつたが、此頃は追々聲が沈んで來て、情を語れるやうになつた。藤の方が少し老けて聞こえたが、相模は申分なく熊谷も堂々として立派で、陣屋らしい模様が浮かび出た。後で思つた事であるが絃の鏡太夫の掛聲が腹から出る豊富な聲量で太夫と競争のやうであつた。

★橋本（操氏、道之助）與次兵衛と治武衛門は手に入つたもので、甚兵衛も我等には曾て見た榮三の甚兵衛が目に浮かびました。世話物はさら／＼と運ばれるのを上々とされますが、此の橋本はさうはゆかない難物で、その難物を氏は巧みに語り去り語り來り、他の追従を許さぬ貫録を示された。

★杓掛（桔梗氏、辰六）氏の杓掛は氏の語り物百段中にも定評のあるもの、我等淺學の到底評するところに非ず、唯感服の外なく拜聴しました。

附記……いつぞや某會座談會の席上で、その夜「山名屋」を語つた某女義の批評となつて、うまいものだとか、今の女義にはあれ程語るの少ないとか、おしまひには、美人で

あるとまで好評又好評、ところが、一人の某氏が「皆様は大變おほめになります、あの山名屋が山名屋になつてゐるかゝるないか？ 問題ではないでせうか」と口を切られたので、又一人が「あまり皆様がおほめになるので遠慮をしてゐたが、私もそれを第一に思つた」と言ひ出された。そこで甲論乙駁となり、結局どう解決されたか私の頭に残らなかつたが「あの山名屋は世話になつてゐない」……或は十種香なら十種香の匂ひもしなかつた……と言つてしまつたら、商賈人として看板をあげてゐるその太夫に瑕をつけるわけで、さりとて、結構でないものを「結構でした」と言ふ事は自分の良心を傷つけるわけになる。批評といふものはむづかしいものと思ひました。

子飼の鶯は良いところもあるが、野に鳴く黄鳥の如き餘韻はない。素人淨瑠璃には餘韻が大切で、野鶯のもつ餘韻は子飼の眞似られぬ尊とさではないでせうか。

新義座の解散後、南部太夫に就いていろ／＼な風説があるので、記者は、新義座の東京事務所として同座の爲め、多大な努力を盡された新橋のしほ屋吉田美地句氏を訪れてその真相を質した。其後南部太夫の上京した事も文樂座入に就て相三味線云々の話も記者は耳にしてゐるが、それは又の折に書く事もある。不取敢左に吉田氏との對話を掲げる事にした。――記者――(▼)吉田美地句氏▽印記者)

▽新義座の解散は、南部太夫病氣の爲めといふ話でしたが解散して間もなく南部太夫は文

解散した新義座に就て

樂へ復歸しましたが、解散をしなければならぬ程の病氣ぢやなかつたのではないですか
▽解散早々文樂へ復歸するからには初めから大した事はなかつたものと思ひます。
▽それでは新義座を解散する要はなかつたでせう。

▼それは南部太夫が計畫的であつたといふ事を後で知つたのですが、一番最初の約束は文樂へ復歸する時には一同が揃つて復歸するといふ約束で組織したものである。それにも拘らず、つばめ太夫は師匠(古鞞太夫)の種々な事情に背むき難く遂に自分一人文樂に復歸してしまつた。しかし其後の新義座は、皆さん

の御同情に依て今日まで運んで来たのですが南部太夫から病氣の爲め休演させてくれといふ事を、勝平師まで申出たので不取敢大垣の吉岡さん(中央事務所)及び東京の有力後援者の了解も得なくてはならないので、南部太夫は六月下旬勝平師同道にて上京し、各方面の有力者に對して宛に角解散の了解を得たので歸阪後勝平師宅で新義座一同に對し解散の決議を發表したわけで、座員一同浪人をするといふ約束で、心よく解散を承諾したのでした。處がそれにも拘らず、南部太夫は益興行(十月)から、文樂へ復歸するといふ交渉が新

義座解散前から成立してをつたといふ話で、實に心外に堪えない事でありませう。新義座解散の挨拶状を手にされた各地の皆様から、お手厚き見舞狀に接し御配慮を煩して感謝してゐる矢先、南部太夫は十月から文樂座出演の挨拶状を此の後援者の皆様へ配布したので、そこではつきりと計畫的であつた事を知り、實に皆様に對して申譯のない次第です。つばめ太夫の復歸はまだしも、南部太夫の悪質なやり方には驚く外ありません。

▼勝平師始め座員の人々はそれを知らなかつたのですか。
▼前に言つた通り、解散の時には行動を共に

するといふ約束であるから、まさか、南部太夫一人だけ復歸の交渉が出来てゐたとは、誰も思ひもよらなかつたです。

▽勝平師はどうして南部太夫の相三味線として、復歸しないのですか。

▼計畫的であつた南部太夫は復歸交渉の成立と共に相三味線もチャンと定つてゐたのでした。これも今になつて知れたのですが、それだけでなく勝平師は、解散する前から文樂へ自分だけ交渉して出演するやうな人の三味線は弾かないでせう。

▽南部太夫が新義座に對して私財を費したといふやうな事を何かの記事で見ましたが、これは事實ですか。

▼とんでもない事です。新義座には皆様の御同情と御後援に依つて赤字は出てゐません。解散の手當も相當分配したらしいです。良い時も悪い時も苦樂は終始一貫の約束であつたので、萬一赤字が出て、南部太夫から補助を受ける座員は一人もないでせう。

▽益替から越路太夫を繼ぐやうな噂さもあつたやうですが、どうなつたでせう。

▼そんな噂も聞きましたが、それは先輩もあることでは、若し南部太夫が軽々しく繼ぐやうな事になれば、赤ん坊と一緒に火でもつかみに行くといふのは此事でせう。

▽残つた座員の人々の動向はどうですか。

▼いろ／＼轉業した人はありますが、組織した當時の約束が實行されず斯ういふ結果になつたのは甚だ遺憾に堪えません。勝平師もさぞ嘆いてゐる事でせう。

太棹社
彙報

第卅一回 東都五十義會秋季大會

今春新橋演舞場に於て第卅回記念祝賀大會を開催した東都五十義會は、第卅一回秋季大會を十月十八日より三日間左記番組に依り秋季大會を開催、星野桔梗氏は今回より審査員を勇退し、高瀬操氏が新たに審査員として就任せられた。

因に審査員勇退の星野桔梗氏は今回より同會の總役見として就任、審査員、開票立會其他役員は左の通り。

審査員(吉田三芳、長谷川文久、安藤光樂、高瀬操)開票立會人、中澤巴、白井清華、小林太二八、田口辰壽、山田壽瓢)理事(及川旭、野島貴昇、安藤都昇、森市菊、山田壽瓢、田中吞笑、岩崎がん

▽本欄は通信又は番組御送付のもの、或は新生の會を報道するものであります。
▽開催前月に詳細を報道したものは開催後の記事を略します。
▽特種の催はしの外前置きを略します。

—記者—

番組

昇、野崎龜鶴、鈴木其芳、清水清司、神樂一樂(總役見)(星野桔梗)藝術顧問(豊澤猿之助)會長(細川清)副會長(高瀬操)
(初日)開會の挨拶(野島貴昇)太十(光秀、がん昇、久吉、壽瓢、さつき、貴昇、操、市菊、十次郎、其芳、初菊、其柳)絃(猿三郎)……油屋(柳正、猿女)忠六(一、巴雪)赤垣(司、昇登)安達(一司、蟻鳳)大文字屋(二蝶、新造)休憩卅分……寺子屋(秀玉、彌國)先代(國華、清松)合邦(龍鳳、巴住)

本下(正風、道之助)鳴門(柳汀、鶴玉)寺子屋(喜鶴、鶴玉)紙治(いさを、清松)陣屋(いづ美、糸造)休憩卅分……野崎(金扇、染登)柳(豊、團八)壺坂(三玉、廣助)御殿(其芳、辰六)宿屋(市菊、福彌)合邦(よろづ、重子)辨上(錦司、糸造)休憩一時間……新口(高尾、駒登)陣屋(米司、糸造)岡崎(旭道之助)挨拶(高瀬操)……東西大關旗返還式。休憩十五分……大切、忠六(勘平、清。郷右衛門、桔梗。彌五郎、三芳母、操。角兵衛、がん昇。種六、市菊。彌八、貴昇)絃(道之助)
(二日目)太十(光秀、壽瓢、久吉、旭、さつき、市菊。操、貴昇。十次郎、都昇。初菊、其芳)絃(糸造)……宿屋(喜國、糸造)松王(藤八、六兵衛)佐太村(英、玉勝)八百屋(葉光、八重子)太十(初音、播菊)休憩卅分……野崎(大和、仙照)酒屋(富穂、駒登)御殿(梅笑、昇之助)太十(壽光、巴住)寺子屋(紅陽、重子)中將姫(かなめ、三平)壺坂(生昇、猿三郎)十種香(都竹、都太夫)休憩……草履打(喜風、道之助)未定(百塚、播菊)三代記(文盛、糸造)赤垣(井上龜鶴、彌國)十種香(松玉、松四郎)吃又(乃菊、佳照)休憩一時間……佐太村(枝蝶、佳照)合邦(東光、

辰六) 鳴門(五口、道之助) 休憩十五分
……大切七段目(由良之助、壽瓢。重太郎、乃菊。彌五郎、其柳。喜太八、其芳おかる、操。力彌、市菊。平右衛門、がん昇) 絃(猿藏) 長唄はやし連中。

(三日目) 太十(光秀、貴昇、久吉、清司、さつき、其芳。操、壽瓢。十次郎其柳。初菊、がん昇) 絃(龜造)……陣屋(清光、重子) 宿屋(喜昇、菅好) 五斗(呑笑、重吉) 忠三(吟青、道之助) 休憩卅分……堀川(綱路、米翁) 合邦(橋駒登) 太十(清芳、芳太郎) 陣屋(松藤松四郎) 合邦(素水、東太夫) 太十(文樂、未定) 百度平(小靜、重吉) 休憩卅分……岸姫(美義、駒登) 新口(錦松、岡三) 寺子屋(鳴門、猿之助) 陣屋(美昇、鏡太夫) 辨慶(玉寶、道之助) 休憩一時間……寺子屋(旭、猿藏) 沼津(三司、猿三郎) 鮎屋(清、道之助) 休憩十分……本下(若狹之助、里芳。本藏、歸世花、三千歳姫、登盛。番左衛門、叶下部、つぼみ) 絃(扇之助) 寺子屋(松王、光樂。源藏、三芳、玄蕃、文久。戸浪、操。千代、桔梗。御臺、菅秀才、壽瓢。百姓、子供、がん昇) 絃(猿之助)……挨拶(細川清) 文部大臣旗盃授興式優勝者賞品授興式、東西大關旗授興式、萬歳三唱、閉會の辭、採點發表、以上。

五芳會生る

中川愛水、田畑千壺兩氏の肝入で、神馬里芳、松岡茂里雄、松浦淀橋氏等に依りて、豊澤芳太郎師の爲め五芳會を組織し十一月八日夜電氣俱樂部に於てその第一回を開催することになつた。番組左の通り。

太十(十次郎、淀橋。初菊、愛水。さつき、千壺。操、里芳。光秀、茂里雄) 先代(里芳) 逆櫓(淀橋) 十種香(愛水) 忠六(茂里雄) 沼津(千壺) 大切野崎村(お光、茂里雄。お染、愛水。久作、千壺。久松、淀橋。母、里芳) 絃(芳太郎) 猿喜知、美之助)

第十二回 兜會秋季大會

時變下に鑑み久しく休演を續けられた兜會は十月廿一日午後二時より雷門並木俱樂部に於て、秋季大會を開催する事になつた。番組左の通り。

寛三郎) 松王郎(美浪、團八) 酒屋(朝正、寛三郎) 鈴ヶ森(松寶、團八) 吃又(和樂、猿藏)……休憩……八陣(春樂猿平) 忠六(加保留、龜造) 新作銃後の美談宮部治三郎住家(清華、寛三郎) 逆櫓(巴、猿藏) 大切掛合本下(若狹之助) 清華。本藏、松寶。三千歳、其晶。番左衛門、泉。下部、加保留) 絃(團八)

批評する會、される會

河野國聲氏の産婆役で、非常なる努力の下に生れた批評する會される會の第一回が、去月十日麻布公會堂に開催された處、各方面から大好評を博して矢次早やに第二回を十月十一日同公會堂で催され

たが、出演者押すなくの超満員の申込みに、第一回の出演者は止むを得ずお断りするといふ有様で、左記出演者力演のもとに午後三時より開催。終つて別室で座談會を催ほし、河野氏は列席の批評家

並びに語り手の紹介に次いで、会場と聴衆の件、座談會には出演者及びその師匠もつとめて残つて貰ひたい事、紳士として旦那衆としての淨曲界に於ける禮儀作法の話なども出て頗る意義あらしめた。

なほ本會は次回より「淨瑠璃同風會」と名命する事に決定し、語つた後の座談會では時間が少ないといふので、時期を見計つて座談のみの會も催し、一夕胸襟を開いて親しみ語らうといふ事も異議な

く可決された。

挨拶(有曲) 沓掛(錦勢、團八) 寺子屋(喜鶴、鶴玉) 鮎屋(痴樂、團八) 太十(鶴三、鶴玉) 岡崎(華笑、勝八) 八百屋(生昇、猿三郎) 膝栗毛(宮古、和孝) 楠三(紅司、辰六) 野崎(大和、仙照) 宿屋(市菊、福彌) 下總屋(越巴、和歌吉) 本下(正鳳、道之助) 埴生村(有曲、猿平) 御殿(喜鳳、道之助) 鳴門(五口、道之助) 岸姫(千鶴、猿平)

一周年 念 素玄淨曲研究會

前號記載の通り、素玄淨曲研究會は一周年を迎へたので、第十三回を一周年記念大會として、九月廿八日午後六時より丸ノ内電気俱樂部に於て開催。終て例に依り座談會を開き十時閉會した。

前號記載の番組と一二變更あり、當夜

の番組は左の通り。

安達(竹史、東太夫、日吉(北斗、種子) 山名屋) 越駒、巴住)

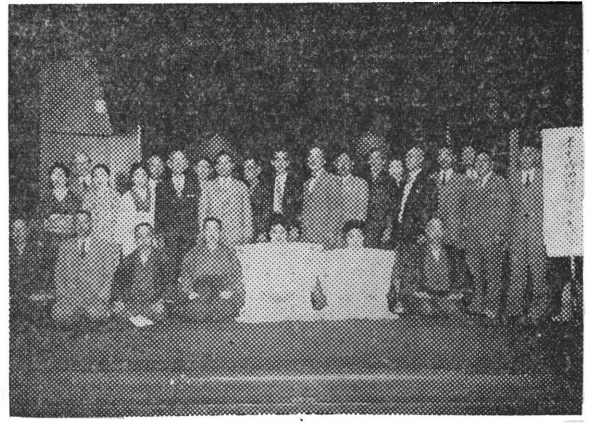
なほ今回は福登久、蘇鳳、其甫、團蝶諸氏出演の下に十月廿二日神樂坂相互俱樂部にて開催。

第十二回 帝都素義聯合會

十月七、八、九の三日間雷門並木俱樂部に開催。

(第一日) 太十(越廣、蟻三郎) 寺子

屋(山生、鹿重) 本下(都、扇七) 鳴門(松峰、鹿重) 忠六(生久、團市) 三代記(みなと、良造) 新口(いづみ、仙玉)



(寫眞は素玄淨曲研究會記念)

岸姫(和雷、呂若) 阿漕(昭平、猿藏) 辨慶(錦司、糸造) 志渡寺(三岳、團市) 忠四(義昇、扇之助) 紙治(昇、團市)

……夜之部……太十(榮、仙玉、佐太村) (枝蝶、佳照) 合邦(あるを、糸造) 吃又(乃菊、佳照) 布四(義雀、良造) 鮎屋(千晴、團市) 岸姫(千鶴、猿平)

(第二日) 壺坂(越江、廣二) 御殿(和泉、蟻三郎) 辨慶(和雷、呂若) 草履打

(喜鳳、道之助) 寺子屋(和狂、猿藏)

阿漕(團壽、團龍) 安達(三由、猿藏)

鮪屋(三壽、松市郎) 鳴門(紫蝶、仙玉)

宿屋(喜聲、素女若) 戀十(智惠子、寛三郎) 岡崎(旭、道之助) ……夜之部:

: 太十(有樂、團市) 安達(柳蝶、鶴玉)

鳴門(五口、道之助) 寺子屋(喜鶴、鶴玉)

蝶八(百塚、播菊) 組打(井筒、勝八) 八百屋(生昇、猿三郎) 新口(桔梗

辰六)

(第三日) 吉田屋(みつ子、扇賀) 玉

三(みやこ、蟻三郎) 陣屋(清昇、團市)

鳴門(春水、蟻三郎) 揚屋(登盛、糸造)

太十(壽光、巴住) 赤垣(司、昇登) 戀

十(金扇、染登) 妙心寺(山門、猿藏)

合邦(龍鳳、巴住) 忠七(國聲、猿三郎)

……夜之部: ……下總屋(越巴、和歌吉) 日

吉(喜城、猿喜知) 太十(素鳳、辰六)

安達(奇聲、和歌吉) 松王郎(喜香、猿

喜知) 鰻谷(千晴、團市) 陣屋(美昇、鏡

太夫) 紙治(呂光、重子) 新口(桔梗、

辰六)

名作淨瑠璃同好會

名作淨瑠璃同好會の第四回は前號記載番組の通り、去る十月二日電氣俱樂部に開催されたが、第五回は十二月十三日午後二時より同じく電氣俱樂部に開催され、赤徳義士討入前夜に因み忠臣藏大序より七段目迄上演する事になつた。

大序兜改(淀橋) 戀歌(八雲) 二段目 桃の井館(金泉) 松切(王華) 三段目進物(有曲) 文使ひ(子太郎) 殿中(掛合)

(師直、淀橋) 判官、愛水。若狭之助、金泉) 裏門(かなめ) 四段目花籠(子太

腹切(猿三郎) 七段目後(佳照)

淨曲 無名會秋季大會

丸ノ内電氣俱樂部を本城として、今夏は冷房完備の淺草松屋ホールで二回開催毎會滿員の盛況は他會に見られぬ淨曲無名會の秋季大會は、今回は前後掛合を添え左記番組に依り、十月十三日午後四時より日本橋俱樂部に賑々しく開催した。

白浪五人男(掛合) 喜鳳、正鳳、五口、

京濱 素義聯盟秋季大會

國友東光氏を會長に、野崎龜鶴氏を副會長として、益々盛會に第五回を重ねた京

濱義聯盟會は、今回秋季大會を十月十日より三日間毎日午後一時より川崎市福町俱樂部に於て左記番組のもとに賑々しく開催した。

(第一日) 鈴ヶ森(光榮、文樂) 夕顔棚(華寶、義雄) 鳴門(玉振、文樂) 壺坂(春日、雷米) 八陣(一鶴、駒登太夫) 十種香(秀の家、雷米) 酒屋(きん子、請調) 陣屋(淑人、雷五郎) 合邦(橋、駒登太夫) 安達(駒司、昇之助) 勘助住家(宮古、和孝) 忠四(吳羽、龜造) 鰯屋(文樂、昇之助) 岸姫(美義、駒登太夫) 日吉(光子、清調) 先代(其芳、重之助) 柳(關路、團蝶) 本下(幹事連掛合)

(第二日) 忠三(芳聲、義雄) 濱松(東玉、文樂) 玉三(群鳳、義雄) 宿屋(佳代子、駒登太夫) 十種香(敬子、雷米) 寺子屋(雅樂、駒登太夫) 安達(廣助、雷米) 組打(龜鶴、重子) 宿屋(市菊、福彌) 壺坂(喜聲、團蝶) 先代(富穂、駒登太夫) 新口(高尾、駒登太夫) 先代(十三三、團蝶) 合邦(東光、重之助) 佐太村(枝蝶、佳照) 沓掛(喜吉、稻吉) 吃又(乃菊、佳照) 伊賀八(旭、道之助) 野崎(幹事連掛合)

(第三日) 妙心寺(玉麟、文樂) 中將姫(優鳳、義雄) 忠六(貴昇、重之助) 合邦(佐喜子、雷米) 鳴門(壽、駒登太夫) 陣屋(清光、重子) 野崎(つる子、雷米) 長局(薫、雷米) 先代(あづま、重子) 酒屋(さかむ、團蝶) 紙治(呂光

東京淨瑠璃人形芝居

南北座の秋季特別公演

池田三國氏主宰の南北座は、傷病兵慰問、公共團體等に出演の目的を以て誕生し、今秋その三周年を迎へた。

此間、氏は傷病兵或は出征家族慰問に盡瘁せられ、なほ又先年、古典藝術として世界に誇るわが「文樂」の人形が、傷兵の義手義足のよき參考資料として戦時下のお役に立つて、文樂關係者をして感激させた事があつたが、傷兵のこの不自由な義手義足に文樂人形を應用し、完璧を期する事が出来たらといふので、當時、陸軍衛生材料廠々長山口誠太郎少將の考案で、少將の知人金川文樂氏を通じて大阪文樂座の桐竹紋十郎にその意を傳へた處、紋十郎氏は東京に文樂人形の研究家池田氏ある事を話し、直ちに同氏に

重子) 先代(春水、蟻三郎) 野崎(古清小松) 太十(美幸、蟻三郎) 毛谷村(吾樂、昇之助) 身賣(清、道之助) 沼津(操道之助) 引窓(桔梗、辰六) 寺子屋(幹事連掛合)

紹介したので、氏は目黒區役所樓上に於て、山口廠長を始め、義手義足製作の權威桂田角太郎中佐外八名並に陸軍省情報部大久保中佐等を招じ、「太功記十段目」を演じて見せた處、此の微妙な人形の動行が活用された結果、從來外國品のみであつたぎこちない義肢の見事に純然たる日本風のものに完成せられたのであるが、池田氏は今回南北座の創立三周年を記念し、左の番組に依り、九月廿六、七、八の三日間毎夕五時より濱町日本橋俱樂部に於て華々しく、秋季特別公演を開催した。

なほ人形では殆ど埋没されてゐた葦原氏伏見里の段を今回上演された外、近頃問題の通し物も上演益々練磨されたるその至藝は稱揚してあまりあるものである

る。

(初日)三番叟(社中)朝顔日記……

船別(松江太夫、美之助)濱松(駒登太夫、松四郎)宿屋より大井川迄(都太夫、龜造)伏見里(浪花太夫、猿平)辨慶(双葉太夫、辰六)

(二日目)三番叟(社中)加賀見山……

草履打(浪花太夫、双葉太夫、美之助)尾上部屋(巴太夫、猿喜知)毛谷村(浪花太夫、猿平)新口村(都太夫、龜造)布四(駒登太夫、松四郎)

(三日目)三番叟(社中)忠臣藏……

三段目殿中(浪花太夫、猿若)裏門(松江太夫、猿平)四段目(浪花太夫、猿平)五段目(巴太夫、猿喜知)六段目身賣(駒登太夫、松四郎)勘平住家(双葉太夫、辰六)勘平切腹(都太夫、龜造)七段目(おかる、浪花太夫、由良之助、双葉太夫、九太夫、駒登太夫。平右衛門、巴太夫)

(人形配役)深雪、常盤御前、おわさ、お初、お園、藤作、判官、おかる(三國)宮城、駒澤、盛長、侍従太郎、岩藤、斧右衛門、忠三女房、平次、師直、郷右衛門、定九郎、由良之助(弦之丞)船頭、郷の君(信吉)淺香、尾上、又五郎、若狭之助、伴内、右馬之丞、與市兵衛、一文字屋、九太夫(清三郎)吉兵衛、德右衛門、宗清、辨慶、六助、糸右衛門

行綱、由良之助、勘平、平右衛門(國五郎)里の子、下女、今若、杣、彌三松、(新太郎)里の子、牛若、杣(豊吉)岩代忠兵衛、藥師寺(三左衛門)白妙、信夫梅川、勘平、顔世御前、彌五郎(國三郎)花の井、小櫻、おかる、力彌(三春)善六、町人、武兵衛、本藏、おかや(傳造)

因會の祖先祭と役員改選

毎年十二月祖先祭を執行して來た日本帝都義太夫因會は、本年度より十月に繰あげ、去る十日午前十時より兩國回向院に於て男女會員出席のもとに、祖先竹本義太夫並に先亡男女太夫三味線の各師の冥福を祈り、一同焼香を終りて各自募參の後、改めて淺草並木俱樂部に集合の上役員改選を行つたが、投票の結果左の諸

お園母(秀造) 乃ほ十月一、二の二日間、日比谷公會堂に於て開催された第七回自治功勞感謝の會に出演(太夫は竹本都太夫絃豊澤猿藏)(竹本浪花太夫、豊澤猿平)の一日替りに安達を熱演して非常な好評を博した。

氏が當選し事務所は豊澤猿藏氏方に決定した。

(會長)豊澤猿之助(相談役)竹本米翁・鶴澤司好(委員)竹本東太夫・竹本都太夫・豊竹巖太夫・鶴澤新造・豊澤猿三郎・野澤条造(會計)豊澤猿藏・豊澤芳太郎。

大阪文樂座十月興行

大阪文樂座人形淨瑠璃は、本格興行として十月一日より四ツ橋文樂座に於て開演、本興行より竹本南都太夫が復歸し、紋下竹本津太夫には鶴澤友次郎、竹本鏝太夫には鶴澤寛治郎、豊竹呂太夫には豊澤新左衛門が相三味線として並ぶ事にな

つた。 鬼一法眼三略卷五條橋(牛若丸、和泉太夫)源太夫)ツレ(富太夫、千駒太夫) (津磨太夫)宮太夫(叶、吉彌)(友造、友平)(友作、叶太郎)(寛若、廣二)(友十郎、吉藏)(廣彌、龍市、團作)(辨慶、

文字(太夫) (當子太夫、隅若太夫) (駒若太夫、松島太夫) (吉左) (團伊三、新太郎) (清友)

迎駕野中の井戸……聚樂町(駒太夫、清二郎)

恩響の彼方に……青の洞門(了海、相生太夫、織太夫) (實之助、相生太夫、織太夫) (石工、長尾太夫) (同女房、竹太夫) (道八、團六、吉季、勝芳、綱延)

紙子仕立両面鑑……大文字屋(中、大隅太夫、廣助) (切、津太夫) (友次郎)

近頃河原の達引……四條河原(鍛太夫、寬治郎) 堀川猿廻し(古靱太夫、清六、ツレ喜代之助)

本朝廿四孝……十種香(八重垣姫、南部太夫。勝頼、織太夫。濡衣、相生太夫。謙信、伊勢太夫。六郎、辰太夫。小文治播路太夫) (重造) 狐火(伊達太夫、友衛門。ツレ、團伊三、新太郎。琴、友三郎)

妹背山婦女庭訓……道行戀の小田巻(おみわ、呂太夫) (求女、和泉太夫、源太夫) (橘姫、文字太夫) ツレ(さの太夫) (相瀬太夫、英太夫) (土佐夫太夫、越名太夫) (新左衛門、叶) (吉彌、寛市) (八造、鶴太郎) (友太郎) (友花、市郎右衛門) (仙糸)

人形配役……了海、權八、傳兵衛(榮

三) お松、おしゆん、おみわ(文五郎) 辨慶、勝頼(玉幸) 小梅、與次郎母(小兵吉) 長吉(文二郎) 由兵衛(榮三郎) 求女(政龜) 石工惣兵衛、謙信(玉市) おみよ、小文治、(文之助) 妙三、濡衣(紋太郎) 忠兵衛、勘造(多三郎) 助右衛門、官左衛門(門造) 傳九郎、與次郎(玉藏) 下女(文枝) 丁稚(紋昇) 久八、六郎(玉徳) おつる(紋司) 牛若丸(實之助、八重垣姫(紋十郎))

銃後慰安・總親和

合同義太夫大會

八重子會、巴雪會連中主催にて、十月七、八、九の三日間夕五時半より喜久本會館に於て合同義太夫會を開催。

(初日) 辨上(重八、勝美) 柳(一、巴雪) 挨拶(阿部一) 壺坂(和子、巴雪) 松王(董雀、八重子) 安達(喜遊、巴雪) 梅由(松壽、八重子) 寺子屋(巴雪會掛合)

(二日目) 太十(梅聲、和子) 鈴ヶ森(二八、八重子) 挨拶(梅村梅聲) 辨上(良子、八重子、十種香(勝美、巴雪) 朝顔(梅勇、八重子) 儀作(三樂、巴雪) 八百屋(葉光、八重子)

(三日目) 酒屋(和子、勝美) 二度目(重八、八重子、挨拶(梅村梅聲) 先代(司、八重子) 太十(梅聲、巴雪) 寺子屋(登昇、八重子) 忠六(一、巴雪) 野崎(八重子會掛合)

中老會

中老會は久々にて十月十四、十五の兩日交正俱樂部に開催。

東都聲義會

十月十九日より三日間相互俱樂部に開催。

大日本素人

淨璃瑠會

大阪の同會は第八回鏡演會を十一月十二日より三日間堀江演舞場にて開催。

綾秀會

九月十日駒形俱樂部に開催。
太十(彌樂) 合邦(壽光) 阿漕(梅月) 揚屋(綾登) 忠四(壽瓢) 絃(綾秀、春子)

宮古兄弟會

高橋宮古氏の兄弟會は十一月二日駒形俱樂部に開催。

先代(千代子)彌作(宮古)鳴門(千代子)忠九(宮古)絃(和孝)餘興に扇太夫と猿喜知の二人羽織。

神馬里芳氏

病氣全快義太夫會

今春病氣の爲め入院せられ、退院後は自宅或ひは温泉等に静養中であつた神馬里芳氏は、昨今全く快癒されたので、女天會々員の外田畑千壺、橋本登の兩氏應援出演のもとに、十月十日夕より文化俱樂部でその快氣祝ひの義太夫會が催ほされ、女天會並びに勝助父子より花輪が贈られ盛會を極めた。

橋辨慶(勝助、龜造)山名屋(駒蝶、勝助)酒屋(仙彌、扇之助)安達(つぼ美、扇之助)壺坂前(加光、仙彌)同奥(歸世花、扇之助)八陣(登盛、条造)十種香(千壺、芳太郎)太十(錦松、龜造)先代(里芳、芳太郎)長局(叶、玉勝)宿屋(里芳、勝助)

竹本双葉太夫

素義山田呂聲氏は、竹本浪花太夫の門下として竹本双葉太夫を名乗り、去る九月廿六日より三日間、日本橋俱樂部に開演された南北座の東京淨瑠璃人形芝居に出演、近江清華氏の見臺肩衣を始め、各方面の關係者より花輪、久壽玉等の贈り物があつた。

文樂座三味線

の大異動

兎角びつたりと來ず替り安いは淨曲界の相三味線で、中にはあれこれと一定しない太夫もあるが、わけて文樂座の巨頭連で相三味線の替ることは最も目立ち、同時に不安を感じるのであつたが、最近ハ豊竹古鞆太夫が鶴澤清六に戻つて文樂黨をしてよろこばせたと始め、今回の益興行からは鶴澤友次郎の紋下竹本津太夫の相三味線となつた事は、何んと言つても名コンビと言ふべきであらう。其他竹本鉸太夫には鶴澤寛治郎、豊竹呂太夫に豊澤新左衛門と大異動があり、今度復歸した竹本南部太夫には鶴澤重造が相三味線となつた。

京城東廣會

京城へ出張稽古中の竹本東廣師の「東廣會」は十月廿四、五の兩日午後六時より美術俱樂部に開催。

(初日)鳴門(お弓、清秀、おつる、貴勢)鈴ヶ森(竹本東)先代前(梅枝)同奥(かすみ)合邦(三國)陣屋(扇昇)玉三(華名目)大切身振入宿屋(かすみ)(二日目)太十(光秀、扇昇)十次郎柳清。初菊、あづま。さつき、かすみ。操、梅枝。久吉、貴勢)新口(柳清)組打(あづま)壺坂(東光)布四(貴勢)堀川(楓江)大切身振入酒屋(三國)

野澤喜左衛門師

追善淨るり會

十一月十二日午前十時より神戸神港俱樂部に於て、京都大阪より多數の出演者を以て盛大な野澤喜左衛門師追善淨るり會が催され、東京よりは近江清華、保谷紅司、栗原千鶴、吉田美地句の諸氏が参加出演される事に決定した。當日の番組左の通り。

初手向菊堂(勝五郎、三郎)講七(三角、吉五郎)未定(古鶴、吉六)壺坂(の

んき、隅龍)合邦(士口、仙作)佐太村
 (雷子、綱司)未定(艶士)未定(公木
 濱右衛門)酒屋(青木、廣左)杵掛(ア
 リオ、吉丸)伊賀五(馬笑、吉五郎)講
 七(清華、觀西翁)日吉(吾妻、濱右衛
 門)未定(鑑玉、吉六)忠四(十八公、
 勝平)忠九(千鶴、觀西翁)近八(濱戸
 勝平)山名屋(颯月、吉五郎)引窓(和
 玉、吉之助)太十(都雀、吉五郎)先代
 (美地句、觀西翁)花菱屋(有斐、兵市)
 忠六(紅司、觀西翁)未定(信濃、稻丸)
 寺子屋(錦昇、勝平)未定(金星)大切。
 千本櫻道行(中儉、共立儉藝妓十四名掛
 合)

浮谷祖樂氏

追善義太夫會

六月廿九日急性肺炎にて享年六十二歳
 を以て永眠された浮谷祖樂氏の爲め、氏
 と交誼厚かりし人々に依て十月二日午後
 二時より、交正俱樂部で盛會な追善義太
 夫會が催されたが、生前氏の三福會々長
 として、頗る熱心なる愛義家であつたこ
 とが偲ばれた。

橋辨慶(福まつ、福代)絃(三福、團
 龍)十種香(福滿津、三福)新口(琴歌
 三福)戀十(東升、鶴松)寺子屋(鶴三

鶴玉)紙治(重夫、鶴松)壺坂(蟻清、
 猿清)酒屋(巴雀、岬太夫)堀川(福代
 三福)安達前(喜鶴、鶴玉)同奥(小六
 三福)先代(一幸、猿清)戀十(里芳、
 勝助)鮎屋(賀代子、鶴松)蝶八(百塚
 播菊)太十(柳蝶、鶴玉)舞踊(浮谷具
 子)柳(双葉、猿清)合邦(柳汀、鶴玉)
 野崎村(掛合)

米谷のん龍

追福義太夫會

竹本米翁師の愛娘ふみ子(のん龍)さ
 んの七回忌追福義太夫會が、恩志會の人
 々に依て十月十五日午後五時から雷門東
 橋亭で催された。

小津賀、和佐之助、團雀、巴太夫、津
 彌太夫、さくら太夫、扇太夫、紋教、三
 生、津賀昇、清照)以上順不同、補助(駒
 若、彌周)

花 輪 ◆ 花 東 ◆ 花 籠

御送迎・御佛事・御見
 舞は何卒弊店へ御用命
 願上候
 新花・廉價・迅速は弊店
 の特色

花

下谷稻荷町(青バス車庫前)

サカタ・フロリスト

電話(下谷)六一八一番

會報

投稿 歡迎

二二三好會

森 三好

初秋とは云へ尙殘暑嚴敷き九月十六日午後六時より菊川俱樂部に於て二二三好會第五回目を開催せり、此日天候順調にして翌日の日曜日を控へたる有閑と相俟つて未だ夕日の没せざる午後六時早や聽客の詰め掛けられたるは感激午後十時半盛會裡に終幕せり因に當夜の語物左の如し。

- 御祝儀(入登) 鈴ヶ森(のし子)千兩幟(三佐保) 酒屋(喜三香) 十種香(二葉)鳴門(三省) 先代(三好) 寺子屋(一勝) 絃(喜三香、三好)
- なほ第六回は小石川俱樂部に於て十月十五日午後六時より開催す。
- 御祝儀(のし子) 陣屋(一勝) 玉三(三佐保) 十種香(二葉) 日吉(喜三香) 鳴門(三省) 野崎(三好) 絃(喜三香、三好、二三香)

一葉會

阿部 一

第五回一葉會を十月五日午後六時より入谷俱樂部で開催致しました。次回は十一月六日牛込相互俱樂部に決定、なほ別報の通り、去る七日より三日間喜久本會館で合同義太夫會を開催大入滿員でありました。

- 鈴ヶ森(二八、八重子) 安達(喜遊、巴雪) 壺坂(和子、巴雪) 二度目(重八、八重子) 寺子屋(一、巴雪) 八百屋(葉光、八重子)

太棹 ニューズ

▼近江清華氏 十月廿一日兜會にて新作

淨瑠璃「銃後の美談、宮部治三郎住家の段」を發表。

▼本木大熊氏 築地「八百善」に於ける江戸會席上、清一の絃にて「寺子屋」を語る十月十五日より茨城古賀方面へ銃獲。

▼岡田蝶花形氏 秋田縣主催秋田縣學校醫會特別講演に出張、會終了後、同市久壽亭にて多數の學校醫を前に「柳」を語る。

蝶花形

酒のまぬわれのさびしや秋田なる
美しく女酌すると來る

御禮

謹啓 陳者小生儀去月十日麻布公會堂に於ける「批評する會・される會」に出演致し候節は御繁忙中御來聽を賜り御懇切なる御高評を忝ふし光榮の至りに奉存候一々趨拜御禮申上べき筈の處乍失禮誌上を以て厚く御禮申上候今後とも何卒御指導の程御願申上候

錦 錦 松

通信

なるべく短文にて
各地の御通信を願
ひます。

北支に於ける斯道の ニュース

森 三好

帝都素養の熱心家森蘇水氏は、豫而鶴澤仲三郎師に付き義太夫を習修し、毎月一回以上各俱樂部其他に於て鶴澤仲次郎師と俱に開演好評を博し、斯道研究練磨爲しつゝありしが、滴々日支事變勃發し之際會し、北支派遣軍同仁會事務長に昇進出征去る昭和十三年五月三十日其送別義太夫會を新宿多良俱樂部に於て開演、同好並に知名士多數の來聴あり盛會裡に告別開散せり、其後數多の送別宴會に招かれ暫くの別れを惜みつゝ出發準備中、若葉薫りて初身を色採る六月二十三日午後一時三十分東京發多數の見送りを忝ふし、驪頭は歡呼萬歲聲裡に汽笛勇ましく一路北支に向け夜發せり。

露營の如き感あり、祖國の夢は北支の大陸に醒め、日過ぎ月經ち年越へ我皇軍の戦果に一變したる太原平靜興亞の第一歩を印するに至る原、爰に於て或る日の事、太原陥落一週年祝賀記念日に稍胸も落付きたる久し振りの宴會場に於て珍らしくも義太夫一段試みたるに、我祖國の同胞上下前後不覺の喜悅滿面、皇軍勇士並に太原祖界の勞苦を慰めたり。元來支那人を言語性能の異なる如く、之が趣味を十分に感ずる能はずとも雖も、其高尚なる藝術の事は、深く感じ共に興に浴したりと。

我同邦人の興味は内地以上の歡迎にて無上の懐かしきものあり。此點より考ふるに將來平和の新日本は斯道の發展可能性の大なる物あり内地の皆様益々演練御上達、近き將來此の純日本性を發揮する義太夫の進展を希望して已まざるものなりと報じをせり。依り同好賢氏の御參考迄に略記報知したるものなり。以上。

臺灣より

竹澤龜次郎

二十七日午前十時半九千六百トン高千穂丸に一座共に乗船致しました。そして正十二時門司を出港二時間位の間は何等一つゆれず、一番船に負ける私も悦に入つて、

座員一同と談笑してをりました處、二時間後突如座員の口より船は走つてゐませんよと云ふ聲にハッとの思ひ窓より見れば、成程南九州の山々が瞳に寫るのでした。風は強く甲板などでは四五歳の子供は打倒される有様にて、遂に危険性ある事とて碇泊の止むなきに致つた事が判りました。時間が過ぎれば過ぎる程に風波高く、大波は何者も一呑みにせん勢ひにて高千穂に打つて掛りました。されど流石大物高千穂は碇泊すれば貧棒ゆるぎもせず、晴渡る青空の間より光々と輝く太陽をあびる。午後六時半我船の廻りには十二雙の汽船が同じ様に海上に姿を止め碇泊やがて空には星がおどづれ太陽は西山に這入り名目と變る。青々とした海原も墨染の海原と變りいやが上りに波音高く其物凄さを物とせしめず、各月名はキラ／＼と波上に寫し、我高千穂丸に向つて何か明日の事を告げてくれる様な氣持で見守つてくれておりました。時間はたち一人伏し、二人寝三人は夢の中に這入る様皆々臉はつづりました。明る太陽は窓より我足元に光る。座員は走りまじりました。といふ、夢路は破られましたのが丁度六時四十分、ボーイ君よりの九月一日八時半に基隆港に這入る豫定が宣言され、やれ／＼と心は落ちつき社長龍造も安心した色が面に浮びました。それは九月一

日臺北初日開場の件、私も直に無線電信第二報を臺北映畫株式會社に走らした。高千穂は波を馳つて一段と強く、午前十一時に至り風は太陽を包み雨が交り流石の高千穂丸も左右前後にゆれ出しとふゝ私にも番手のゆれに負けて情けな其内一人倒れ三人伏し遂に一座二十三人迄皆小間物屋の御店開きの有様。午前二時に漸く波風も納まり、そろ／＼起き上る者が出て來た。晝と違つて夜の乗船氣分は又一段と變り、氣分晴れば娘子軍は元氣快復。待ちに待つた午前八時半にならぬ八時に楽しい基隆港に這入りました。臺北より出張の映畫配給株式會社々長を始め、事務員及臺北市の藝術新報社々長赤星氏外事務員、それに臺北榮座の人々小旗を振つて迎えられ、我方は是れに負けつと多數本の竹澤一座の旗を座員が打ふり／＼歡聲にひかへられて花々しい何んと楽しい嬉しう上陸か、そして基隆驛旅館に一行休憩十時半の列車にて一同臺北に着一層の出迎ひを受け、自動車人力車と二夕手に乗車して一同榮座に乗込みました。初日は六時十分開幕幕合は五十分の少い時間に座員は航海のつかれも忘れ、東京義太夫歌舞伎の眞意を充分に御見せ致しました。

本誌 後援 名譽 會員

(イロハ順)

(東京之部)

廣瀬 いろは氏
吉川 浪補氏
阿部 一氏
北島 北斗氏
中澤 巴氏
安藤 どころ氏
吉田 登盛氏
小川 都山氏
安藤 都昇氏
保々 長平氏
緒方 千晴氏
栗原 千鶴氏

岸 竹史氏
神馬 里芳氏
岡本 柳光氏
本木 大熊氏
鈴木 和樂氏
小林 和舟氏
林 和勢氏
飛石 かなめ氏
加藤 兜氏
高橋 可遊氏
西田 可松氏
大用 大嘉津氏
田口 辰壽氏

疋田 大龍氏
井上 巽氏
小林 太二八氏
根本 團壽氏
野田 高尾氏
杉山 橘氏
坂倉 素遊氏
川口 子太郎氏
小埜 長とろ氏
宮本 武藏氏
萩原 うつぼ氏
乃村 乃菊氏
中野 吳羽氏
山下 彌生氏
國井 やまと氏

菅原 葉光氏
松林 福笑氏
長谷川 文久氏
鈴木 兒雀氏
安藤 光樂氏
水戸部 壽氏
原田 越巴氏
河野 國聲氏
松岡 語松氏
田中 湖月氏
湯淺 光玉氏
岡崎 田六氏
寶藏寺 天昇氏
大築 葵氏
松本 朝章氏

及川 旭氏
 柳 有明氏
 中川 愛氷氏
 奥村 三玉氏
 寺岡 三幸氏
 木村 さかえ氏
 齋藤 山生氏
 平井 榮氏
 細川 清氏
 金田 金鳳氏
 錦 錦松氏
 淺田 奇聲氏
 星野 桔梗氏
 日野 金泉氏
 前島 貴昇氏
 歸山 歸世花氏

猪谷 銀水氏
 岩木 義雀氏
 吉良 蟻若氏
 岩田 末成氏
 高瀬 操氏
 吉田 美地旬氏
 横井 三由氏
 野口 みなと氏
 北村 三葵氏
 池田 三國氏
 吉田 三芳氏
 高橋 宮古氏
 鈴木 松寶氏
 小原 松樂氏
 菊池 秋月氏
 平井 壽樂氏

山田 壽瓢氏
 田口 司重氏
 濱口 秋華氏
 武笠 宏亮氏
 高品 一重氏
 平山 平茶氏
 桑原 美峰氏
 佐野 美昇氏
 松岡 茂里雄氏
 白井 清華氏
 近江 清華氏
 湯原 清司氏
 沼井 盛鶴氏
 時田 靜史氏
 (地方之部)
 米國 平野 一昇氏
 同武 榮玉氏

同 杉山 陶岳氏
 同 兼廣 廣玉氏
 同 西本 西紫氏
 神戸 岡田 源氏
 大垣 吉岡 十八公氏
 船橋 川奈部 銀司氏
 下關 保良 鈴鳳氏
 横濱 和田 和朝氏
 同 霜島 錦司氏
 八幡 古賀 大彌氏

名譽會員

緒方 千晴氏
 奥村 三玉氏
 日野 金泉氏
 前島 貴昇氏

本誌後援名譽會員を御快諾
 賜り難有奉謝候

當座帳

編輯後記

▽和田金扇氏 五聲會へ入會。
▽小林和舟氏 雷門「舟和」の店內改築

▽鶴澤友治郎 紋下竹本津太夫の相三味線となる。
▽竹本南部太夫 十月興行より文樂座に復歸

▽竹本越名太夫 同上。
▽鶴澤綱延 同上。

▽鶴澤勝芳 同上。

大阪文樂座人形淨瑠璃 (十二月東上)

寄贈新刊

▽明るい家▽大日本淨瑠璃界▽風▽オー
ル演藝▽みどり▽淨曲新報▽淨瑠璃時報
▽文樂▽藝▽淨曲研究▽淨瑠璃月報▽京
城のラヂオ▽寶塚月報▽露▽斯水▽土
大橋圖書館第三十周年報▽大東京素人義
太夫見立鑑(井上泉氏)▽義太夫批評集
(岡田蝶花形氏)

★秋冷の候皆々様愈々御健勝の段大慶の至りに存じます。

★本月に入つては名作淨瑠璃同好會を皮切りに、帝都素義聯合會、京濱素義聯盟會、批評する會、される會(第三回よりは淨瑠璃同風會と名命)淨曲無名會、東都五十義會、兜會と大會に次いで、五芳會の誕生、帝都の秋は淨曲界第一線に立つて彩るの觀があります。

★本誌も皆様から「太棹は近頃大變に内容が充實して來た」とのお言葉をいただき嬉れしく存じます。

★本號も亦記事輻輳で、中野三允氏の「實事譚」を初め、二三の原稿を次號にまはさせていたゞきました。

★本號は彙報欄が九頁といふ増頁で賑ひましたが、來月からは大會が減りますので淋しくなる事でありませう。お催しの御通信を何卒落山御願ひ申上ます。これは、床世話に御下命なさるゝのが一番世話でなく、又床世話もハガキ一枚で用の足りる事で、一つはお得意の皆様に對しての義務かと思はれます。(芳河士)

ての義務かと思はれます。(芳河士)

(行發日十回一月毎)		號 八 百 第	
料告廣	價 一 定	別 一	一 部
特 別	一 年	一 頁	金 三 十 錢
一 頁	分 金 三	一 頁	六 月 分 金 一 圓 八 十 錢
金 參 拾 圓	圓	金 貳 拾 圓	郵 稅 共
	郵 稅 共		郵 稅 三 錢
<p>▽記念寫眞掲載料は一頁金拾五圓申受ます</p> <p>▽誌代は總て前金御拂込の事</p> <p>▽なる可く振替に御送金の事</p> <p>▽郵券代用は一割増但三錢切手の事</p>			
<p>昭和十四年十月八日 印刷納本 昭和十四年十月十日 發行</p> <p>東京市小石川區音羽二丁目四 編輯兼 發行人 富 取 壽 鹿</p> <p>東京市牛込區早稻田町五八 印刷人 栗 原 榮 松</p> <p>東京市牛込區早稻田町五八 印刷所 栗 原 印刷所</p> <p>電話牛込一四五番</p> <p>東京市小石川區音羽二丁目四 發行所 太 棹 社</p> <p>掛號東京三一七八五番</p>			

近刊 帝都素義名鑑

東都素義界に未だ名鑑のない事を遺憾とします。弊社は皆様の御近影に平素御愛用の語り物を始め、師匠名並に會名其他の略傳を付し、近日「帝都素義名鑑」の刊行を企てました。初め「東都素義名流大鑑」といふ名稱でありましたが、皆様の御意見もあり、今回「帝都素義名鑑」と改める事に致しました。しかし、もつと良い名稱がありましたなら何卒御教示を御願ひ申上ます。

五月頃には刊行の豫定でありましたが、今後こうした名鑑は五年十年の間には編纂不可能と存じますので、此際お一人も多く御賛同を仰ぎ度く、發行を延期致し極力勸誘申上げたいと存じます。

本名鑑は寫真本位として、一頁金拾貳圓（配本共）四六倍版、上質アート、和製チツ入にて装幀の高雅は、皆様の御机上に一層の光彩を添へる事と存じます。

弊社の此の企畫を御援助賜り、何卒御賛同御申込みを偏に御願ひ申上ます。

太 棹 社